

◎指示があるまで開かないこと。

(令和4年2月5日 9時30分～12時15分)

注 意 事 項

1. 試験問題の数は75問で解答時間は正味2時間45分である。
2. 解答方法は次のとおりである。
 - (1) (例1)、(例2)の問題ではaからeまでの5つの選択肢があるので、そのうち質問に適した選択肢を(例1)では1つ、(例2)では2つ選び答案用紙に記入すること。なお、(例1)の質問には2つ以上解答した場合は誤りとする。(例2)の質問には1つ又は3つ以上解答した場合は誤りとする。

(例1) 101 医業が行えるのはどれか。

- a 合格発表日以降
- b 合格証書受領日以降
- c 免許申請日以降
- d 臨床研修開始日以降
- e 医籍登録日以降

(例2) 102 医籍訂正の申請が必要なのはどれか。2つ選べ。

- a 氏名変更時
- b 住所地変更時
- c 勤務先変更時
- d 診療所開設時
- e 本籍地都道府県変更時

(例1)の正解は「e」であるから答案用紙の **e** をマークすればよい。

答案用紙①の場合、

101	<input type="radio"/> a	<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> c	<input type="radio"/> d	<input type="radio"/> e
			↓		
101	<input type="radio"/> a	<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> c	<input type="radio"/> d	<input checked="" type="radio"/>

答案用紙②の場合、

101	101
<input type="radio"/> a	<input type="radio"/> a
<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> b
<input type="radio"/> c	→ <input type="radio"/> c
<input type="radio"/> d	<input type="radio"/> d
<input type="radio"/> e	<input checked="" type="radio"/>

(例2)の正解は「a」と「e」であるから答案用紙の **a** と **e** をマークすればよい。

答案用紙①の場合、

102	<input type="radio"/> a	<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> c	<input type="radio"/> d	<input type="radio"/> e
			↓		
102	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> c	<input type="radio"/> d	<input checked="" type="radio"/>

答案用紙②の場合、

102	102
<input type="radio"/> a	<input checked="" type="radio"/>
<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> b
<input type="radio"/> c	→ <input type="radio"/> c
<input type="radio"/> d	<input type="radio"/> d
<input type="radio"/> e	<input checked="" type="radio"/>

(2) (例3)では質問に適した選択肢を3つ選び答案用紙に記入すること。なお、(例3)の質問には2つ以下又は4つ以上解答した場合は誤りとする。

(例3) 103 医師法に規定されているのはどれか。3つ選べ。

- a 医師の行政処分
- b 広告可能な診療科
- c 不正受験者の措置
- d 保健指導を行う義務
- e 都市部で勤務する義務

(例3)の正解は「a」と「c」と「d」であるから答案用紙の **(a)** と **(c)** と **(d)** をマークすればよい。

答案用紙①の場合、

103	<input type="radio"/> a	<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> c	<input type="radio"/> d	<input type="radio"/> e
			↓		
103	<input type="radio"/>	<input type="radio"/> b	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/> e

答案用紙②の場合、

103	103
<input type="radio"/> a	<input type="radio"/>
<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> b
<input type="radio"/> c	→ <input type="radio"/>
<input type="radio"/> d	<input type="radio"/>
<input type="radio"/> e	<input type="radio"/> e

- 1 睡眠時無呼吸症候群による高血圧について、正しくないのはどれか。
- a 夜間高血圧となることが多い。
 - b 肥満患者では減量を推奨する。
 - c α 遮断薬が第一選択薬である。
 - d 家庭血圧では早朝に高血圧となることが多い。
 - e 持続的気道陽圧法(CPAP)で降圧が期待される。
- 2 妊娠末期の腔分泌物細菌培養検査でB群連鎖球菌(GBS)が陽性となった妊婦に対する母子感染予防対策として、ペニシリン系抗菌薬の投与を開始する適切な時期はどれか。
- a 陽性判明の時点
 - b 妊娠 37 週時
 - c 陣痛開始時
 - d 子宮口全開大時
 - e 児頭排臨時
- 3 中心性漿液性脈絡網膜症について誤っているのはどれか。
- a 夜盲を自覚する。
 - b 変視症を自覚する。
 - c 自然治癒することが多い。
 - d 蛍光眼底造影が有用である。
 - e 光干渉断層計(OCT)が有用である。

4 単剤の内服で低血糖の原因になる可能性が高いのはどれか。

- a DPP-4 阻害薬
- b SGLT2 阻害薬
- c ビグアナイド薬
- d スルホニル尿素薬
- e α グルコシダーゼ阻害薬

5 我が国での成人心臓移植について正しいのはどれか。

- a 10年生存率は約10%である。
- b 年間約1,000例行われている。
- c 原疾患は拡張型心筋症が最も多い。
- d 原則として術後に免疫抑制薬は用いられない。
- e 2015年以降の平均待機期間は1年以下である。

6 高カリウム血症の原因となるのはどれか。

- a β 刺激薬
- b インスリン
- c ループ利尿薬
- d グリチルリチン
- e レニン・アンジオテンシン系抑制薬

7 逆流性食道炎の誘因とならないのはどれか。

- a 肥 満
- b 高 齢
- c 亀 背
- d 萎縮性胃炎
- e カルシウム拮抗薬

8 心不全で来院した患者において心サルコイドーシスの所見に合致しないのはどれか。

- a 房室ブロック
- b 持続性心室頻拍
- c 左室駆出率の低下
- d 心室中隔の非対称性肥大
- e FDG-PET での心筋への異常集積

9 骨壊死のリスクファクターでないのはどれか。

- a 飲 酒
- b 減圧症
- c 放射線照射
- d 有機リン剤
- e 副腎皮質ステロイド

- 10 全身性強皮症による続発性 Raynaud 現象の特徴はどれか。
- a 片側性である。
 - b 家族歴がある。
 - c 若年発症が多い。
 - d 手指腫脹を伴う。
 - e 血圧の左右差を伴う。
- 11 自閉スペクトラム症の特徴でないのはどれか。
- a 男児に多い。
 - b 感覚過敏がある。
 - c 対人関係の苦手さがある。
 - d 就学前に症状がみられる。
 - e 物事に対するこだわりが弱い。
- 12 急激な血圧上昇を認める患者で、高血圧緊急症の病態として考えにくいのはどれか。
- a 急性大動脈解離
 - b 褐色細胞腫クリーゼ
 - c 乳頭浮腫を伴う脳浮腫
 - d 肺水腫を生じた急性心不全
 - e 肺動脈性肺高血圧症を伴う呼吸不全

- 13 脳血管性認知症について正しいのはどれか。2つ選べ。
- a 50歳台では発症しない。
 - b 運動障害を伴うことが多い。
 - c 脳梗塞の初回発作では生じない。
 - d 頭部MRI・MRA画像では異常を認めない。
 - e 脳血流SPECTにおける血流分布異常は特定のパターンを示さない。
- 14 病原体と悪性腫瘍の組合せで正しいのはどれか。2つ選べ。
- a ヒトパピローマウイルス ————— 子宮体癌
 - b 成人T細胞白血病ウイルス ————— 肺癌
 - c C型肝炎ウイルス ————— 肝細胞癌
 - d *Helicobacter pylori* ————— 胃癌
 - e EBウイルス ————— 膀胱癌
- 15 急性腎障害の診断に用いられる指標はどれか。2つ選べ。
- a 尿蛋白量
 - b 腎の長径
 - c 時間尿量
 - d 尿潜血の程度
 - e 血清クレアチニン値の上昇速度

16 76歳の女性。高血糖と尿蛋白を指摘されて来院した。退職前の健診で血糖値が高めであることを指摘されていたが、そのままにしていた。60歳で退職後は健診を受診していなかった。退職後の3年間で体重が10kg増加した。既往歴に特記すべきことはない。姉に糖尿病がある。現在はひとり暮らしである。運動習慣はない。視力低下のために眼科を受診したところ、増殖性糖尿病網膜症と診断され、高血糖と尿蛋白も指摘されて紹介された。身長154cm、体重70kg。脈拍72/分、整。血圧142/80mmHg。胸腹部に異常を認めない。両下腿に軽度の圧痕性浮腫を認める。尿所見：蛋白2+、糖3+、潜血(-)。随時尿の尿蛋白/Cr比は1.2g/gCr(基準0.15未満)。尿沈渣に赤血球1~2/HPF、白血球1~2/HPF、円柱を認めない。血液生化学所見：総蛋白6.1g/dL、アルブミン4.2g/dL、尿素窒素16mg/dL、クレアチニン0.6mg/dL、eGFR72.3mL/分/1.73m²、随時血糖値201mg/dL、HbA1c10.2%(基準4.6~6.2)、Na142mEq/L、K4.5mEq/L、Cl100mEq/L、Ca9.2mg/dL。抗GAD抗体陰性。尿蛋白の原因を調べるための腎生検は患者が希望しなかった。

本患者の蛋白尿の原因が糖尿病性腎症であることを最も示唆する所見はどれか。

- a 姉の糖尿病歴
- b 抗GAD抗体陰性
- c 糖尿病網膜症の存在
- d 随時血糖値>200mg/dL
- e 尿蛋白/Cr比>1.0g/gCr

17 6か月の男児。嘔吐を主訴に母親に連れられて来院した。寝返りをした際に約50 cmの高さのベッドからフローリングの床に転落し、その後嘔吐と活気不良を認めた。新生児期に血友病 A と診断されている。同疾患の家族歴がある。身長70 cm、体重9 kg。体温36.8℃。心拍数120/分、整。血圧86/56 mmHg。呼吸数32/分。SpO₂ 98%(room air)。活気不良。顔色不良。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は平坦、軟。血液所見：赤血球320万、Hb 10.2 g/dL、Ht 30%、白血球14,000、血小板25万、PT-INR 1.3(基準0.9~1.1)、APTT 98.3秒(基準対照37.1)、血漿フィブリノゲン150 mg/dL(基準186~355)。血液生化学所見：総蛋白4.5 g/dL、アルブミン2.8 g/dL、AST 30 U/L、ALT 26 U/L、LD 774 U/L(基準120~245)、尿素窒素12 mg/dL、クレアチニン0.6 mg/dL、血糖120 mg/dL。頭部単純CT(別冊No. 1)を別に示す。

適切な初期対応はどれか。

- a 赤血球輸血
- b 自宅で経過観察
- c 新鮮凍結血漿投与
- d 凝固第IX因子製剤投与
- e 凝固第VIII因子製剤投与

別冊 No. 1

18 23歳の男性。工作中居眠りが多く、重要な商談や会議中でも発作的に眠ってしまうことが多いため来院した。数年前から夜間十分に眠っても日中に何回も急に強い眠気を認めるようになり、最近は大笑いや驚いた後に急に全身の力が抜けることが増えてきたという。神経診察に異常を認めない。

この患者にみられる可能性が高い特徴はどれか。

- a 入眠時に金縛りにあう。
- b 夜間せん妄を合併する。
- c 睡眠発作後にも眠気が残る。
- d 睡眠中にパニック発作を認める。
- e 睡眠中に脚を動かしたいという欲求が強まる。

19 62歳の女性。息切れと全身倦怠感を主訴に来院した。7日前に発作性心房細動に対してカテーテルアブレーションが施行されており、3日前に退院していた。退院翌日に息切れと全身倦怠感が出現し、症状が徐々に増悪するため受診した。意識は清明。体温 36.2℃。脈拍 112/分、整。血圧 88/72 mmHg。血圧は吸気時に収縮期血圧が 18 mmHg 低下する。呼吸数 18/分。SpO₂ 95% (room air)。呼吸音に異常を認めない。心音は微弱だが雑音は聴取しない。頸静脈は怒張している。血液所見：赤血球 462 万、Hb 13.2 g/dL、Ht 39%、白血球 9,700、血小板 39 万。血液生化学所見：尿素窒素 44 mg/dL、クレアチニン 1.7 mg/dL、Na 141 mEq/L、K 4.2 mEq/L、Cl 110 mEq/L。

最も考えられる病態はどれか。

- a 後腹膜血腫
- b 心室中隔穿孔
- c 肺血栓塞栓症
- d 心タンポナーデ
- e 完全房室ブロック

20 64歳の男性。呼吸困難を主訴に来院した。4日前に左胸痛と息切れが出現し、次第に増悪してきたため受診した。体温36.2℃。脈拍100/分、整。血圧120/80 mmHg。呼吸数20/分。SpO₂92%(room air)。眼瞼結膜と眼球結膜とに異常を認めない。頸部リンパ節を触知しない。左胸部に呼吸音を聴取しない。血液所見：赤血球420万、Hb13.0 g/dL、Ht37%、白血球4,400、血小板21万。CRP0.4 mg/dL。来院時の胸部エックス線写真(別冊No. 2A)を別に示す。入院後、胸腔ドレーンを挿入したところ、直後から咳嗽と泡沫状の喀痰が出現した。この時点の胸部エックス線写真(別冊No. 2B)を別に示す。

胸腔ドレーン挿入後の病態として正しいのはどれか。

- a 肺炎
- b 肺水腫
- c 無気肺
- d 肺胞出血
- e うっ血性心不全

別冊

No. 2 A、B

21 73歳の男性。総胆管結石の加療目的で内視鏡的結石除去術を施行した。3時間後から持続性の心窩部痛と背部痛を訴えた。体温 35.8℃。脈拍 104/分、整。血圧 84/56 mmHg。呼吸数 20/分。SpO₂ 93%(room air)。顔面は蒼白である。腹部は平坦で、心窩部に圧痛と筋性防御を認める。血液所見：赤血球 430万、Hb 15.3 g/dL、Ht 44%、白血球 11,000、血小板 23万、PT-INR 1.0(基準 0.9~1.1)。血液生化学所見：総ビリルビン 1.2 mg/dL、AST 20 U/L、ALT 19 U/L、LD 151 U/L(基準 120~245)、ALP 110 U/L(基準 38~113)、 γ -GT 22 U/L(基準 8~50)、アミラーゼ 1,495 U/L(基準 37~160)、クレアチニン 1.0 mg/dL。CRP 1.0 mg/dL。腹部造影 CT(別冊No. 3)を別に示す。

初期治療として、輸液に加えて行うべき治療で適切なのはどれか。

- a 血漿交換
- b 緊急開腹手術
- c 膵酵素阻害薬投与
- d ステロイドパルス療法
- e 内視鏡的胆道ドレナージ術

別冊 No. 3

22 22歳の男性。健診で腎機能低下を指摘され心配になり来院した。母親と叔父が透析治療を受けている。血液生化学所見：尿素窒素 28 mg/dL、クレアチニン 1.5 mg/dL。腹部 MRI(別冊No. 4)を別に示す。

この疾患で誤っているのはどれか。

- a 肝嚢胞の合併が多い。
- b 常染色体優性型である。
- c 新生児期から発症する。
- d 脳動脈瘤の発生頻度が高い。
- e 治療薬にバソプレシン V2 受容体拮抗薬がある。

別 冊

No. 4

23 38歳の男性。1週間前から皮下出血が出現したため自宅近くの診療所を受診したところ、白血球減少と血小板減少を指摘され精査のため紹介受診した。体温36.6℃。脈拍92/分、整。血圧118/76 mmHg。眼瞼結膜は貧血様で眼球結膜に黄染を認めない。心音と呼吸音に異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。両下肢に紫斑を認める。血液所見：赤血球381万、Hb 12.6 g/dL、Ht 36%、白血球2,400(芽球9%、前骨髄球60%、分葉核好中球12%、リンパ球19%)、血小板1.6万。血液生化学所見：総蛋白7.7 g/dL、アルブミン4.8 g/dL、総ビリルビン1.1 mg/dL、直接ビリルビン0.1 mg/dL、AST 29 U/L、ALT 30 U/L、LD 365 U/L(基準120~245)、ALP 110 U/L(基準38~113)、尿素窒素18 mg/dL、クレアチニン1.1 mg/dL、尿酸9.3 mg/dL、Na 143 mEq/L、K 3.9 mEq/L、Cl 107 mEq/L、Ca 9.3 mg/dL。CRP 0.3 mg/dL。骨髓血塗抹May-Giemsa染色標本写真(別冊No. 5)を別に示す。

この患者に投与すべき薬剤はどれか。

- a イマチニブ
- b ゲフィチニブ
- c シクロスポリン
- d ブレオマイシン
- e 全トランス型レチノイン酸

別冊 No. 5

24 45歳の男性。嗄声を主訴に来院した。2年前から誘因なく嗄声が出現し、咽喉異物感と慢性的な咳が続いている。喫煙歴と飲酒歴はない。喉頭内視鏡写真(別冊No. 6)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 喉頭癌
- b 声帯結節
- c 喉頭乳頭腫
- d 声帯ポリープ
- e 喉頭白斑(板)症

別 冊

No. 6

25 13歳の女子。バスケットボールの試合中に気分不快と腹痛が出現したため、教師に付き添われ来院した。会場で用意された弁当を食べて約1時間後に試合に出場した。試合開始10分後に気分不快と全身の皮膚瘙痒及び強い腹痛が現れた。弁当の主な副食材はイカであり、最近1年ほどは食べていなかったという。診察時には気分不快や腹痛のピークは過ぎていた。意識は清明。体温36.8℃。脈拍80/分。呼吸数18/分。SpO₂100%(room air)。血圧110/76 mmHg。呼吸音に異常を認めない。腹部は平坦、軟で、軽度の紅斑と膨疹を認める。血液所見：赤血球430万、Hb 12.5 g/dL、白血球4,800(分葉核好中球42%、好酸球2%、リンパ球56%)、血小板21万。CRP 0.3 mg/dL。

今後の対応として適切なのはどれか。

- a 部活動を止めさせる。
- b イカの摂取を禁ずる。
- c プリックテストを行う。
- d 運動前の食事は禁止する。
- e 運動前にステロイド薬を内服させる。

26 30歳の男性。「3か月くらい前から、仕事の能率が悪いのが気になる」と訴えて産業医面談を希望した。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行に伴い、約半年前から会議もオンラインで行う在宅勤務となった。妻と3歳の男児との3人暮らしだが、自宅周囲の騒音や男児の世話のためにイライラして仕事に集中できないという。約1か月前から寝酒を飲んで眠るようになったが、その頃から朝の起床時に気持ちが沈んでいることが多くなった。毎日疲れが残り、気がつくとき取り留めなく考え事をしているという。

産業医の対応として適切でないのはどれか。

- a 精神科受診を勧める。
- b 寝酒はやめるように指導する。
- c 本人の同意を得て上司と面談する。
- d 仕事の仕方や内容について詳しく聴く。
- e 感染症の流行が終息するまで辛抱するよう励ます。

27 81歳の男性。呼吸困難のため救急車で搬入された。自宅近くの診療所でCOPDと診断され、気管支拡張薬による治療を受けていた。本日午前2時頃から呼吸困難が出現し、鼻カニューラで0.5L/分の酸素を投与されながら午前8時に救急搬送された。意識は清明。体温38.3℃。心拍数72/分、整。血圧128/64 mmHg。呼吸数16/分。聴診で両側呼吸音の減弱を認める。血液所見：白血球9,800(好中球91%、好酸球0%、単球5%、リンパ球4%)。CRP 4.0 mg/dL。動脈血ガス分析(鼻カニューラ0.5L/分 酸素投与下)：pH 7.33、PaCO₂ 58 Torr、PaO₂ 62 Torr、HCO₃⁻ 30 mEq/L。肺野条件の胸部CT(別冊No. 7A)と喀痰Gram染色標本(別冊No. 7B)とを別に示す。

まず行うべきなのはどれか。

- a 原因菌のワクチンを接種する。
- b 非侵襲的陽圧換気を開始する。
- c 鼻カニューラの酸素流量を増やす。
- d 呼吸リハビリテーションを開始する。
- e アミノグリコシド系抗菌薬を投与する。

別冊

No. 7 A、B

28 23歳の男性。全身倦怠感、食欲不振、悪心を主訴に来院した。1週間前から症状が出現し、昨日から褐色調の尿が出るようになった。下痢はない。飲酒は機会飲酒。1か月前に同性間の性交渉歴がある。意識は清明。体温37.2℃。眼球結膜の黄染を認める。肝を右季肋部に2cm触知し、軽度の圧痛を認める。血液所見：赤血球490万、Hb14.5g/dL、Ht42%、白血球6,300(好中球42%、好酸球1%、好塩基球1%、単球9%、リンパ球45%、異型リンパ球2%)、血小板28万、PT-INR1.1(基準0.9~1.1)。血液生化学所見：総蛋白7.2g/dL、アルブミン3.9g/dL、IgG1,140mg/dL(基準960~1,960)、IgM473mg/dL(基準65~350)、総ビリルビン8.1mg/dL、直接ビリルビン5.7mg/dL、AST984U/L、ALT822U/L、LD423U/L(基準120~245)、ALP143U/L(基準38~113)、 γ -GT266U/L(基準8~50)。免疫血清学所見：HBs抗原陰性、IgM型HBc抗体陰性、HCV抗体陰性、HCV-RNA陰性、IgM型HA抗体陽性、IgA型HEV抗体陰性、RPR1倍未満(基準1倍未満)、TPHA320倍(基準80倍未満)。

この患者で考えられる疾患はどれか。

- a A型肝炎
- b B型肝炎
- c C型肝炎
- d D型肝炎
- e E型肝炎

29 40歳の男性。字がうまく書けないことを主訴に来院した。3年前から書類にサインするときに字がうまく書けないことに気づいていたが、徐々に仕事にも支障をきたすようになった。それ以外の日常生活に支障はない。神経診察では筋トーンスは正常で不随意運動はみられない。四肢筋力低下はなく腱反射は正常である。協調運動障害と感覚障害は認めない。鉛筆で字を書くように指示すると、示指と中指の近位指節間関節と遠位指節間関節が強く屈曲し、歪んだ形の字となった。

考えられるのはどれか。

- a 書 癱
- b 痙性斜頸
- c 本態性振戦
- d ジスキネジア
- e アステリキシス

30 42歳の男性。下腹部痛と悪心を主訴に来院した。生来健康で、半年前の定期健診でも異常は指摘されなかった。朝食後に右側腹部に張る感じがあり、次第に痛みへと変わり、急速に激痛となった。うずくまってじっとしているうちに数分で痛みは一旦改善したが10分ほどで悪化し、悪心とともに嘔吐した。その後も数分から10数分の周期で痛みと悪心があり、タクシーで来院した。発熱は認めない。痛みは下方へと少しずつ移動しており来院時には右下腹部痛を認めるが、右側腹部から背部のこわばるような違和感も持続している。

予想される所見はどれか。

- a 尿潜血3+
- b 両側水腎症
- c 尿沈渣で赤血球円柱+
- d 血清クレアチニン値10.2 mg/dL
- e 尿蛋白/クレアチニン比5.5 g/gCr

31 48歳の女性。口渇と全身倦怠感を主訴に来院した。5日前に発熱と腹痛があった。食事はいつも通り摂取している。意識は清明。体温36.8℃。脈拍84/分、整。血圧108/68 mmHg。眼瞼結膜と眼球結膜に異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。尿所見：蛋白(-)、糖3+、ケトン体3+、潜血(-)。血液所見：Hb 13.2 g/dL、白血球9,500、血小板24万。血液生化学所見：血糖440 mg/dL、HbA1c 5.8% (基準4.6~6.2)、Cペプチド0.2 ng/mL (基準0.8~2.5)。

患者への説明として適切なのはどれか。

- a 「食事と運動で良くなります」
- b 「直ちにインスリンを使用します」
- c 「まず飲み薬で糖尿病の治療を始めます」
- d 「HbA1cが正常なので糖尿病とはいえません」
- e 「経過観察のため半年後に受診してください」

32 生後10時間の男児。在胎39週、体重2,960 g、Apgarスコア7点(1分)、8点(5分)で出生した。助産師がチアノーゼに気づき医師に報告した。出生時にはチアノーゼに気づかなかったという。体温36.9℃。心拍数128/分。呼吸数38/分。SpO₂(room air)76%(上肢)、75%(下肢)。高濃度酸素を投与してもチアノーゼは持続した。心エコー検査では4つの心腔が確認されるが、右心室から肺動脈への駆出血流は確認できない。動脈管から肺動脈に流入している少量の血流を認めた。

この児に適切な初期対応はどれか。

- a 利尿薬の投与
- b ドパミンの投与
- c ジゴキシンの投与
- d 高濃度酸素の継続
- e プロスタグランディン E₁ の投与

33 73歳の男性。歩行時の左下肢痛を主訴に来院した。2か月前から400m程度の歩行で左ふくらはぎに痛みが出現し、立ち止まって休憩すると消失していた。最近200m程度で症状を認めるため来院した。43歳から糖尿病に対して定期的な投薬治療が行われている。7年前に狭心症に対して冠動脈内ステント留置術が行われており、5年前から透析治療を受けている。喫煙は20歳から現在まで20本/日、飲酒は機会飲酒。意識は清明。身長169cm、体重57kg。体温35.9℃。脈拍84/分、整。血圧158/92mmHg。呼吸数20/分。SpO₂95%(room air)。足関節上腕血圧比<ABI>は右側で0.91、左側で0.65であった。

研修医と指導医の会話を示す。

指導医：「この患者さんの症状をどう表現しますか」

研修医：「①間欠性跛行だと思います」

指導医：「背景にある病態として、どのようなものがありますか」

研修医：「②神経性のものとして腰部脊柱管狭窄症などがあり、③血管性のものとして浅大腿動脈の狭窄などがあります」

指導医：「この患者さんのABI値からは何が疑われますか」

研修医：「④閉塞性動脈硬化症の可能性が高いと思います」

指導医：「今後、どのような検査を行いますか」

研修医：「⑤ガドリニウム造影MRI検査を予定します」

下線部のうち誤っているのはどれか。

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤

34 出生当日の新生児。在胎 40 週、体重 3,020 g、Apgar スコア 8 点(1 分)、9 点(5 分)で出生。助産師が外性器の特徴に気づき医師に報告した。外性器の外観写真(別冊No. 8)を別に示す。鼠径部に腫瘤を触れない。

両親への説明として適切なのはどれか。

- a 「外性器が未成熟ですぐには性別を確認できない状態です」
- b 「約 1 年の成長をみながら性別を確定していきます」
- c 「これから確認をしますがおそらく女兒です」
- d 「染色体検査を行えば性別を確定できます」
- e 「半陰陽といわれている状態です」

別 冊

No. 8

35 52歳の男性。全身倦怠感を主訴に来院した。6週間前に進行肺腺癌と診断され、3週間前に免疫チェックポイント阻害薬による初回治療を受けた。全身倦怠感が出現したため受診した。意識は清明であるが受け答えは緩慢である。体温36.8℃。脈拍108/分、整。血圧72/50 mmHg。呼吸数20/分。SpO₂97% (room air)。軽度腫大した甲状腺を触知する。血液所見：赤血球320万、Hb12.0 g/dL、Ht38%。血液生化学所見：血糖104 mg/dL、TSH0.1 μU/mL(基準0.2~4.0)、ACTH2.0 pg/mL(基準60以下)、FT₄1.8 ng/dL(基準0.8~2.2)、コルチゾール0.1 μg/dL(基準5.2~12.6)であった。胸部エックス線写真で原発巣の縮小を認める。甲状腺超音波検査では軽度の甲状腺腫大以外は異常を認めない。

治療として適切なのはどれか。

- a 赤血球輸血
- b インスリン投与
- c 殺細胞性抗癌薬投与
- d 甲状腺ホルモン投与
- e 副腎皮質ステロイド投与

36 63歳の男性。腹痛、腹部膨隆を主訴に来院した。2年前から臍部の膨隆がみられていたが、これまで臥位で自然消失していた。3時間前から臍部は膨隆したままであり、腹痛が増悪するため受診した。4年前からアルコール性肝硬変で入退院を繰り返している。腹部手術の既往はない。来院時、意識は清明。身長169 cm、体重68 kg。体温36.5℃。脈拍58/分、整。血圧178/94 mmHg。眼瞼結膜と眼球結膜に異常を認めない。心音と呼吸音に異常を認めない。腹部は膨隆、緊満し波動を認め、腸雑音は亢進している。臍部に膨隆がみられる。血液所見：赤血球395万、Hb 12.0 g/dL、Ht 36%、白血球5,800、血小板9.0万。血液生化学所見：総蛋白5.1 g/dL、アルブミン2.1 g/dL、総ビリルビン0.5 mg/dL、AST 62 U/L、ALT 54 U/L、LD 252 U/L(基準120~245)、ALP 85 U/L(基準38~113)、 γ -GT 59 U/L(基準8~50)、アミラーゼ90 U/L(基準37~160)、尿素窒素25 mg/dL、クレアチニン1.7 mg/dL、血糖195 mg/dL、Na 138 mEq/L、K 4.8 mEq/L、Cl 107 mEq/L。CRP 0.2 mg/dL。腹部単純CT(別冊No. 9)を別に示す。徒手整復を試みたが成功しなかった。

この患者に行う対応について適切なのはどれか。

- a 緊急手術を行う。
- b 下剤を投与する。
- c 鎮痛薬を投与する。
- d 徒手整復を繰り返す。
- e 臍膨隆部の穿刺を行う。

別 冊

No. 9

37 72歳の女性。血小板減少の精査を自宅近くの医療機関で行っていたが、精神症状が出現したため入院となった。感冒様症状で自宅近くの医療機関を受診したところ血小板5.6万と減少を認めた。翌日からつじつまの合わない言動が出現したため入院となった。意識レベルはJCS I-2。体温37.9℃。脈拍76/分、整。血圧156/96 mmHg。眼瞼結膜は貧血様で、眼球結膜に軽度黄染を認める。胸骨右縁第2肋間を最強点とするLevine 2/6の収縮期駆出性雑音を聴取する。呼吸音に異常を認めない。腹部の診察で異常を認めない。尿所見：蛋白2+、潜血3+。血液所見：赤血球230万、Hb 6.1 g/dL、Ht 26%、白血球9,700、血小板4.7万、PT-INR 1.1 (0.9~1.1)、APTT 26.1秒(基準対照32.2)、FDP 9 μg/mL(基準10以下)。血液生化学所見：総ビリルビン2.4 mg/dL、直接ビリルビン0.5 mg/dL、AST 50 U/L、ALT 40 U/L、LD 1,150 U/L(基準120~245)、尿素窒素70 mg/dL、クレアチニン2.5 mg/dL。末梢血塗抹May-Giemsa染色標本(別冊No. 10)を別に示す。

治療として適切なのはどれか。

- a 抗菌薬投与
- b ヘパリン投与
- c 血漿交換療法
- d 血小板製剤輸血
- e トロンボポエチン受容体作動薬の投与

別冊
No. 10

38 62歳の男性。下行結腸癌と診断され、開腹による左半結腸切除を予定している。28歳時に虫垂炎による腹膜炎で1か月の入院歴がある。身長175 cm、体重60 kg。体温36.2℃。脈拍76/分、整。血圧120/70 mmHg。呼吸数14/分。眼瞼結膜と眼球結膜に異常を認めない。心音と呼吸音に異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。右下腹部と腹部正中に手術痕を認める。血液所見：赤血球410万、Hb 13.8 g/dL、Ht 42%、白血球5,200、血小板16万。PT-INR 1.0(基準0.9-1.1)、APTT 29.0秒(基準対象32.2)。血液生化学所見：総蛋白7.4 g/dL、アルブミン4.0 g/dL、総ビリルビン0.8 mg/dL、AST 18 U/L、ALT 20 U/L、LD 196 U/L(基準120~245)、ALP 102 U/L(基準38~113)、クレアチニン0.8 mg/dL、Na 140 mEq/L、K 3.8 mEq/L、Cl 100 mEq/L、CEA 5.2 ng/mL(基準5以下)。

この患者の周術期管理で適切なのはどれか。

- a 手術の2時間前まで固形物摂取を許可する。
- b ベッド上安静が術後3日間必要である。
- c 流動食は術後1週間から開始とする。
- d 手術中患者の体温を室温で管理する。
- e 持続硬膜外麻酔による鎮痛を行う。

39 20歳の女性。腹部の皮疹を主訴に来院した。1か月前から腹部に多発する皮疹が出現し消退せず持続している。掻痒はない。母親も15歳から同様の皮疹が認められ、Kaposi水痘様発疹症をしばしば発症する。発熱はない。頸部、腋窩、肋骨部、乳房下、腹部、鼠径に暗褐色の丘疹が多発している。患者と母親にATP2A2遺伝子の同じ部位の変異が同定された。腹部の写真(別冊No. 11A)と生検組織のH-E染色標本(別冊No. 11B)とを別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a Sweet病
- b Darier病
- c Kaposi肉腫
- d 尋常性天疱瘡
- e アトピー性皮膚炎

別冊

No. 11 A、B

40 15歳の男子。下肢の痛みと赤褐色尿のため家族とともに来院した。3日前に野球部の練習に参加し、炎天下での激しいトレーニング中に頭痛と下肢の脱力を認めたが飲水と休憩で改善した。2日前から両大腿前面に筋肉痛を感じながら練習を続けていた。昨晚から赤褐色尿が出現したため受診した。意識は清明。身長167 cm、体重62 kg。体温37.1℃。脈拍84/分、整。血圧134/62 mmHg。呼吸数16/分。SpO₂ 98% (room air)。心音と呼吸音に異常を認めない。腰背部痛と両大腿の筋痛を認める。神経診察に異常を認めない。尿所見：色調は暗褐色、比重1.022、pH 6.5、蛋白+、潜血3+、沈渣に赤血球1～4/HPFを認める。血液所見：赤血球536万、Hb 16.0 g/dL、Ht 45%、白血球9,000、血小板28万。血液生化学所見：総蛋白6.7 g/dL、アルブミン4.2 g/dL、AST 1,927 U/L、ALT 366 U/L、CK 155,150 U/L(基準30～140)、尿素窒素8.7 mg/dL、クレアチニン0.6 mg/dL、尿酸4.6 mg/dL、Na 142 mEq/L、K 4.0 mEq/L、Cl 105 mEq/L。

最初に行う輸液の組成として適切なのはどれか。

- a 5%ブドウ糖液
- b Na⁺ 154 mEq/L、Cl⁻ 154 mEq/L
- c Na⁺ 84 mEq/L、K⁺ 20 mEq/L、Cl⁻ 66 mEq/L、L-Lactate⁻ 20 mEq/L
- d Na⁺ 84 mEq/L、K⁺ 200 mEq/L、Cl⁻ 66 mEq/L、L-Lactate⁻ 20 mEq/L
- e Na⁺ 30 mEq/L、Cl⁻ 20 mEq/L、L-Lactate⁻ 20 mEq/L

41 45歳の男性。右耳の難聴と耳鳴を主訴に来院した。今朝から急に右耳が聞こえにくくなり、ジーという耳鳴も出現した。めまいはなかった。鼓膜に異常を認めない。オーディオグラム(別冊No. 12)を別に示す。頭部MRIは正常であった。

適切な治療薬はどれか。

- a 抗菌薬
- b 利尿薬
- c 抗ウイルス薬
- d ガンマグロブリン
- e 副腎皮質ステロイド

別 冊
No. 12

42 36歳の女性(2妊0産)。妊娠36週4日、腹痛を主訴に来院した。来院時、身長152 cm、体重68 kg。体温36.8℃。脈拍110/分、整。血圧162/108 mmHg。腹部は硬く、子宮口は6 cm開大、腔内には凝血塊が認められた。超音波検査で児の推定体重2,300 g、胎盤の厚さは7 cmであった。胎児心拍数陣痛図(別冊No. 13)を別に示す。

適切な対応はどれか。

- a 緊急帝王切開
- b 止血薬点滴静注
- c 子宮収縮薬点滴静注
- d 副腎皮質ステロイド筋注
- e 硫酸マグネシウム点滴静注

別 冊
No. 13

43 28歳の男性。心窩部痛を主訴に来院した。2週間前から空腹時に軽度の心窩部痛を自覚していたが、昨日から増悪するため受診した。20歳から十二指腸潰瘍で繰り返し薬物治療を受けている。25歳時に下垂体腺腫摘出術を受けている。身長176 cm、体重64 kg。体温36.2℃。脈拍96/分、整。血圧98/62 mmHg。腹部は平坦、軟で、上腹部に軽度の圧痛を認める。直腸指診で黒色便の付着を認める。血液所見：赤血球360万、Hb 11.5 g/dL、Ht 36%、白血球8,800、血小板29万。血液生化学所見：総蛋白6.9 g/dL、アルブミン3.6 g/dL、ALP 192 U/L (基準38~113)、尿素窒素20 mg/dL、クレアチニン0.8 mg/dL、Ca 11.6 mg/dL、P 2.2 mg/dL。上部消化管内視鏡検査で多発胃潰瘍および十二指腸潰瘍を認めた。頸部超音波検査で甲状腺背側に径0.5 cmの腫瘤を認めた。腹部造影CT動脈相で脾体部に強く造影される径1 cmの腫瘤を認めた。

この患者で上昇していると考えられるホルモンはどれか。

- a TSH
- b ACTH
- c ガストリン
- d カテコラミン
- e テストステロン

44 22歳の女性。無月経を主訴に来院した。初経は12歳。13歳から不規則月経となり14歳から無月経となった。特に困っていることはなかったが、職場の同僚にすすめられて産婦人科を受診した。家族歴、既往歴に特記すべきことはない。身長164 cm、体重56 kg。体温36.8℃。脈拍72/分、整。血圧106/76 mmHg。甲状腺腫大は認めない。乳房発育は不良。乳頭の圧迫で乳汁分泌を両側に認める。外性器は女性型。陰毛と腋毛に異常を認めない。子宮長は3 cm、子宮内膜は薄い。両側卵巣は正常大。基礎体温は1相性である。

高値が予想されるのはどれか。

- a GH
- b FSH
- c TSH
- d ACTH
- e プロラクチン

45 38歳の女性。右膝痛を主訴に来院した。3週間前にバレーボールの練習中に右膝を捻って受傷し、疼痛が軽減しないため受診した。MRI検査で右膝内側半月板断裂が認められた。右膝関節の関節鏡所見(別冊No. 14 ①～⑤)を別に示す。

半月板断裂を示している画像はどれか。

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤

別 冊

No. 14 ①～⑤

46 53歳の男性。家族からいびきを指摘されたことを主訴に来院した。10年ぶりに会った友人に鼻が大きくなって顔つきが変わったと言われた。最近靴が窮屈になってきている。2年前に手根管症候群で手術。身長173cm、体重72kg。体温36.4℃。脈拍56/分、整。血圧156/90mmHg。血液生化学検査：AST 38 U/L、ALT 42 U/L、ALP 256 U/L(基準38~113)、空腹時血糖126 mg/dL、総コレステロール254 mg/dL、トリグリセリド216 mg/dL、HDLコレステロール48 mg/dL。

この患者の確定診断に必要な内分泌検査はどれか。

- a GHRH 負荷試験
- b ブドウ糖負荷試験
- c インスリン負荷試験
- d グルカゴン負荷試験
- e デキサメタゾン抑制試験

47 32歳の女性。昨晚同意のない性行為を強要され、本日警察官に付き添われて受診した。警察官から被害状況の説明を受け、診察をすることになった。月経周期は28日型、整、順。最終月経は12日前から5日間。

対応として適切でないのはどれか。

- a 性感染症の検査を行う。
- b 緊急避妊薬を提案する。
- c 婦人科診察について本人の同意を得る。
- d DNA 診断のための検体を腔内から採取する。
- e 被害の状況を本人から再度聴き取って確認する。

48 10か月の男児。嘔吐と血便を主訴に母親に連れられて来院した。今朝から急に嘔吐が続き、時折激しく泣くこともあり、昼間から血便が複数回みられた。意識は清明だが不機嫌で激しく泣いている。体温 37.2℃。脈拍 160/分、整。血圧 84/52 mmHg。呼吸数 30/分。毛細血管再充満時間 1 秒。SpO₂ 99% (room air)。心音と呼吸音に異常を認めない。腹部は軟で、右上腹部に腫瘤を触知する。血液検査所見に異常を認めない。腹部エックス線写真では右上腹部に腸管ガス像がなく、鏡面像や腹腔内遊離ガス像は認めなかった。腹部超音波像では target sign を認めた。

保護者への説明として適切なのはどれか。

- a 「高圧浣腸で整復できれば帰宅できます」
- b 「炎症を抑えるため抗菌薬の内服が必要です」
- c 「腹膜炎を併発しているため緊急手術になります」
- d 「グリセリン浣腸をして便の状態を確認しましょう」
- e 「高圧浣腸で整復できなければ開腹手術になります」

49 45歳の男性。労作時の息切れ、全身倦怠感を主訴に来院した。5年前からサイクリングで遠出をすると息切れを自覚していた。徐々により軽い労作で症状が出現するようになり、半年前からは15分程度の通勤でも息切れが出現し、駅の階段を一気に昇れないこともあった。会社の健診では、以前から心雑音を指摘されていたが精査は行っていない。家族歴に特記すべきことはない。意識は清明。体温36.0℃。脈拍88/分、整。血圧124/72 mmHg。呼吸数16/分。SpO₂ 95% (room air)。呼吸音に異常を認めない。Levine 4/6の収縮期雑音を聴取する。心電図では左室高電位、心室期外収縮の3連発を認めた。心エコー検査では左室拡張末期径は60 mm、左室駆出率は40%であり、大動脈弁は二尖弁と判断された。連続波ドプラ法による測定では大動脈弁最大血流速度は5.0 m/秒であり、大動脈弁口面積は0.65 cm²と推定された。

適切な対応はどれか。

- a 大動脈弁置換術
- b 植込み型除細動器の植込み
- c トレッドミル運動負荷心電図
- d 治療せずに半年後に心エコー検査
- e ヒト心房利尿ペプチド(hANP)投与

50 35歳の男性。咳嗽、発熱、呼吸困難を主訴に来院した。3週間前から乾性咳嗽が出現し、5日前から発熱と呼吸困難を認めるため受診した。1か月前に築30年の家の掃除を行ったという。意識は清明。身長168 cm、体重80 kg。体温38.4℃。脈拍104/分、整。血圧112/62 mmHg。呼吸数18/分。SpO₂ 90 % (room air)。心音と呼吸音に異常を認めない。血液所見：赤血球416万、Hb 12.6 g/dL、Ht 38%、白血球10,500 (好中球74%、好酸球4%、好塩基球0%、単球3%、リンパ球19%)、血小板30万。血液生化学所見：総ビリルビン0.5 mg/dL、AST 24 U/L、ALT 37 U/L、LD 201 U/L (基準120~245)、ALP 69 U/L (基準38~113)、γ-GT 52 U/L (基準8~50)、尿素窒素8.7 mg/dL、クレアチニン0.6 mg/dL、血糖92 mg/dL。CRP 10 mg/dL。胸部エックス線写真(別冊No. 15A)と胸部単純CT(別冊No. 15B)とを別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 過敏性肺炎
- b 特発性肺線維症
- c 非結核性抗酸菌症
- d マイコプラズマ肺炎
- e 新型コロナウイルス肺炎

別 冊

No. 15 A、B

51 日齢14の男児。染色体検査の結果説明のため両親とともに来院した。在胎39週、出生体重2,800g、Apgarスコア8点(1分)、9点(5分)で出生した。体重3,300g。体温36.5℃。心拍数120/分。呼吸数40/分。SpO₂98%(room air)。切れ上がった目、平坦で低い鼻、口外に突き出た舌などの顔貌異常を認める。心音に異常はなく心雑音も認めない。呼吸音に異常を認めない。軽度の腹部膨満を認める。手掌単一屈曲線を認め、筋緊張低下を認める。染色体検査(別冊No. 16)を別に示す。

この患児に今後合併する可能性が高いのはどれか。

- a 脳性麻痺
- b Wilms腫瘍
- c 滲出性中耳炎
- d 難治性下痢症
- e 甲状腺機能亢進症

別 冊

No. 16

52 19歳の男性。実験中に水酸化ナトリウム液を右眼に浴び、救急受診した。意識は清明。右眼の結膜浮腫が著明であり、角膜が白濁している。

まず行うべきなのはどれか。

- a 鎮痛薬の内服
- b 希塩酸液の点眼
- c 抗菌薬の点滴静注
- d 生理食塩液での洗眼
- e 高浸透圧利尿薬の点滴静注

53 76歳の男性。喀痰の増悪を主訴に入所している介護施設の職員に伴われて来院した。8年前に胃癌に対して胃全摘術を受けた。その後体重減少をきたし、5年前から喀痰が出現した。1週間前から喀痰量が増加し喀出困難となったため受診した。身長157 cm、体重41 kg。体温37.5℃。脈拍72/分、整。血圧134/84 mmHg。呼吸数18/分。SpO₂ 96 % (room air)。両側の胸部に coarse crackles を聴取する。皮膚のツルゴールは低下している。血液所見：赤血球424万、Hb 13.6 g/dL、Ht 28 %、白血球11,400 (好中球81 %、単球5 %、リンパ球14 %)、血小板35万。血液生化学所見：総蛋白7.9 g/dL、血清アルブミン2.7 g/dL。尿素窒素37 mg/dL、クレアチニン0.8 mg/dL。CRP 13 mg/dL。喀痰 Gram 染色標本(別冊 No. 17)を別に示す。

補液を開始し、この微生物の同定および薬剤感受性試験の結果を待つ間に投与を開始すべき抗菌薬はどれか。

- a セファゾリン
- b ピペラシリン
- c バンコマイシン
- d クリンダマイシン
- e ベンジルペニシリン

別 冊

No. 17

54 2歳の男児。テレビの音が以前より大きいことを心配した母親に伴われて来院した。1週間前に両側の耳痛と鼻汁があり、2日でおさまった。それ以降、呼びかけに応答しないことがしばしばあった。身長90cm、体重13kg。体温36.5℃。耳介と外耳道に異常を認めない。左鼓膜所見(別冊No. 18)を別に示す。

診断確定のために有用なのはどれか。

- a 語音聴力検査
- b 純音聴力検査
- c 聴性脳幹反応
- d オルファクトメトリ
- e インピーダンスオージオメトリ

別 冊

No. 18

55 24歳の医療職。採血中に患者に使用した注射針を誤って指に刺した。患者と医療職の検査結果を示す。

患 者：HBs 抗原(+)、HBs 抗体(-)、HCV 抗体(-)

医療職：HBs 抗原(-)、HBs 抗体(-)、HCV 抗体(-)

医療職への対応として適切なのはどれか。

- a 無投薬
- b HB ワクチンの単独投与
- c 核酸アナログ製剤の投与
- d 抗HBs ヒト免疫グロブリンの単独投与
- e HB ワクチン及び抗HBs ヒト免疫グロブリンの投与

56 18歳の男子。全身倦怠感と発熱を主訴に来院した。2週間前から労作時の息切れを自覚していた。3日前から38℃台の発熱と全身倦怠感があり受診した。身長170 cm、体重60 kg。体温38.3℃。脈拍100/分、整。血圧118/64 mmHg。両下肢に点状出血を認める。眼瞼結膜は貧血様であるが、眼球結膜に黄染を認めない。胸骨右縁第2肋間を最強点とするLevine 2/6の収縮期駆出性雑音を聴取する。呼吸音に異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。圧痛を認めない。血液所見：赤血球230万、Hb 6.8 g/dL、Ht 20%、白血球1,400(分葉核好中球24%、単球2%、リンパ球74%)、血小板1.2万。血液生化学所見：総蛋白6.8 g/dL、アルブミン3.4 g/dL、総ビリルビン0.7 mg/dL、AST 56 U/L、ALT 71 U/L、LD 158 U/L(基準120~245)、尿素窒素14 mg/dL、クレアチニン0.7 mg/dL、血糖98 mg/dL。CRP 4.2 mg/dL。骨髄生検では著明な低形成所見を認める。

この患者で低下するのはどれか。

- a フェリチン
- b 網赤血球数
- c ビタミンB₁₂
- d エリスロポエチン
- e 好中球アルカリフォスファターゼスコア

57 2か月の女児。けいれん重積のため救急車で搬入された。母親によると夜間寝ていてけいれんが始まった。救急車内で心肺停止となり心肺蘇生を試みたが、来院時は心拍の再開がなく、対光反射は消失していた。蘇生を継続したが心拍の再開がなく死亡が確認された。母子手帳によると妊娠分娩歴に異常はないが、1か月健診は受診していない。顔面や体幹に新旧混在した皮下出血の散在を認めた。死後に行った頭部CTでは両側に硬膜下血腫とびまん性脳浮腫を認めた。全身エックス線写真では左大腿骨骨折、右上腕骨骨折を認めた。母親は外傷に心当たりはないという。

死亡に至った原因として最も考えられるのはどれか。

- a 虐待
- b てんかん
- c 不慮の事故
- d 熱性けいれん
- e 細菌性髄膜炎

58 69歳の男性。左鼻出血と複視を主訴に来院した。1か月前から左鼻出血を繰り返し、徐々に左鼻閉が悪化した。2日前から物が二重に見えることを自覚した。副鼻腔の造影CT(別冊No. 19A)と造影MRI(別冊No. 19B)とを別に示す。左鼻腔生検で扁平上皮癌を認めた。

この患者で認められるのはどれか。

- a 難聴
- b 眼球突出
- c 開口障害
- d 味覚障害
- e 嚥下障害

別冊

No. 19 A、B

59 8歳の女児。著しい痒痒を伴う皮疹を主訴に来院した。背部の所見(別冊No. 20)を別に示す。同様の皮疹が背部以外にも顔面、腹部、肘窩、膝窩など全身に認められる。白血球8,600(好酸球12%)。IgE 2,800 IU/mL(基準250以下)。抗原特異的IgEはハウスダスト、スギ花粉等吸入性抗原に強陽性を示すが、食物抗原は陰性であった。注意すべき合併症はどれか。

- a 気胸
- b 貧血
- c 白内障
- d 円錐角膜
- e アナフィラキシー

別冊
No. 20

60 80歳の男性。左側頭部から左頬部の皮疹を主訴に来院した。3か月前に左側頭部に紫紅色斑が出現した。次第に拡大、隆起し、出血するようになった。10年前から心房細動で抗凝固薬を服用中である。皮疹の契機について思い当たることはないという。左側頭部に皮疹を認める。鱗屑は認めない。左頸部リンパ節を触知する。左側頭部の写真(別冊No. 21)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 血管肉腫
- b 有棘細胞癌
- c 老人性紫斑
- d 血管拡張性肉芽腫
- e 抗凝固薬の内服による紫斑

別冊
No. 21

61 A 64-year-old man was brought to the emergency department because of left hemiplegia with impaired consciousness. On physical examination, consciousness level was GCS E4V4M6, blood pressure 164/82 mmHg, pulse rate 96/min and irregular. Neurological examination was unremarkable except for left hemiplegia. No carotid bruit was heard on either side. Brain MRI is shown in the figure (別冊No. 22) .

Which of the following is the most likely ECG diagnosis?

- a Atrial fibrillation
- b Supraventricular tachycardia
- c Third-degree atrioventricular block
- d Ventricular fibrillation
- e Ventricular tachycardia

別 冊

No. 22

62 58歳の女性。下腿の浮腫を主訴に来院した。毎年職場健診を受診していたが、異常は指摘されなかった。半年前の健診ではじめて蛋白尿を指摘されたが、症状がないのでそのままにしていた。1か月前から両下腿の浮腫が出現し、次第に増悪したので受診した。身長160 cm、体重60 kg。脈拍64/分、整。血圧132/90 mmHg。胸腹部に異常を認めない。両下腿に圧痕性浮腫を認める。皮膚に異常を認めない。尿所見：蛋白3+、糖(-)、潜血(-)、沈渣に赤血球0~2/HPF、白血球0~2/HPF、硝子円柱を少数認める。随時尿の尿蛋白280 mg/dL、クレアチニン70 mg/dL。血液所見：赤血球460万、Hb13.1 g/dL、Ht42%。血液生化学所見：総蛋白5.3 g/dL、アルブミン2.6 g/dL、IgG1,100 mg/dL(基準960~1,960)、IgA386 mg/dL(基準110~410)、IgM188 mg/dL(基準65~350)、尿素窒素31 mg/dL、クレアチニン1.3 mg/dL、eGFR33.5 mL/分/1.73 m²、尿酸7.0 mg/dL、血糖102 mg/dL、HbA1c5.9%(基準4.6~6.2)、LDLコレステロール213 mg/dL。免疫血清学所見：CRP0.1 mg/dL、抗核抗体20倍(基準20以下)。腎生検のPAM染色標本A(別冊No. 23A)と蛍光抗体IgG染色標本B(別冊No. 23B)とを別に示す。Congo-Red染色は陰性である。

尿蛋白の原因として最も考えられるのはどれか。

- a 膜性腎症
- b 強皮症腎
- c 糖尿病性腎症
- d アミロイド腎症
- e 微小変化型ネフローゼ症候群

別 冊

No. 23 A、B

63 78歳の女性。1週間前から38℃台の発熱が持続し、全身倦怠感のため来院した。身長151 cm、体重42 kg。体温38.2℃。脈拍92/分、整。血圧84/50 mmHg。胸腹部に異常所見を認めない。皮膚の乾燥や四肢に浮腫を認めない。血液生化学所見：尿素窒素24 mg/dL、クレアチニン0.7 mg/dL、空腹時血糖65 mg/dL、Na 129 mEq/L、K 5.1 mEq/L、抗利尿ホルモン1.4 pg/mL(基準0.5~2.0)。随時尿での尿中Naは16 mEq/Lであった。

この患者で認められる所見はどれか。

- a 低尿酸血症
- b 低レニン血症
- c 尿浸透圧低下
- d 甲状腺機能低下症
- e 低コルチゾール血症

64 61歳の男性。右膝痛を主訴に来院した。疼痛のため一本杖歩行をしている。2か月前に大腸癌の手術を受け、現在薬物による抗癌治療中である。余命は2年以上と考えられている。意識は清明。身長172 cm、体重75 kg。右膝は高度の内反変形があり、屈曲80度、伸展-20度の可動域制限がある。右膝関節の単純エックス線写真で変形性膝関節症を認め、人工膝関節置換術の適応とされた。

今後の治療の組合せとして適切なのはどれか。

- a がん治療、膝治療ともに放棄
- b がん治療を終了し膝の保存治療
- c がん治療を終了し膝の手術治療
- d がん治療を継続しながら膝の保存治療
- e がん治療を継続しながら膝の手術治療

65 35歳の経産婦(3妊2産)。妊娠34週2日、妊婦健康診査のため受診した。妊娠初期から妊婦健康診査を受けていた。30歳時および32歳時に、それぞれ骨盤位および既往帝王切開の適応で選択的帝王切開の既往がある。身長157 cm、体重55 kg(非妊時46 kg)。体温36.8℃。脈拍80/分、整。血圧110/74 mmHg。1日に数回の子宮収縮を自覚している。胎児心拍数陣痛図で異常を認めない。1週間前に施行した骨盤MRIのT2強調矢状断像(別冊No. 24)を別に示す。

説明として適切なのはどれか。2つ選べ。

- a 「胎盤の後面に血腫をみとめます」
- b 「胎盤が内子宮口を覆っています」
- c 「臍帯血管が内子宮口上を走行しています」
- d 「胎盤の一部が子宮壁から剝がれています」
- e 「胎盤が子宮筋層を貫いている可能性があります」

別 冊

No. 24

66 34歳の女性。前胸部痛を主訴に来院した。3か月前から前胸部痛が出現し徐々に増強してきた。体温36.8℃。血圧118/64mmHg。SpO₂98%(room air)。心音と呼吸音に異常を認めない。胸部エックス線写真(別冊No. 25 A)と胸部造影CT(別冊No. 25 B)とを別に示す。

考えられる疾患はどれか。2つ選べ。

- a 胸腺腫
- b 神経鞘腫
- c 心膜嚢胞
- d 胸膜中皮腫
- e 悪性リンパ腫

別冊 No. 25 A、B

67 44歳の女性。人間ドックで肝機能障害を指摘され来院した。輸血歴、飲酒歴、家族歴に特記すべきことはない。眼球結膜に黄染を認めない。血液所見：赤血球496万、Hb 14.8 g/dL、Ht 44%、白血球5,200、血小板25万。血液生化学所見：総蛋白7.5 g/dL、アルブミン3.9 g/dL、AST 26 U/L、ALT 32 U/L、ALP 238 U/L(基準38~113)、 γ -GT 266 U/L(基準8~50)。免疫血清学所見：HBs抗原陰性、HCV抗体陰性。肝生検組織の門脈域のH-E染色標本(別冊No. 26)を別に示す。

予想される血液検査値はどれか。2つ選べ。

- a IgM 高値
- b 胆汁酸低値
- c 総コレステロール低値
- d 抗ミトコンドリア抗体陽性
- e α -フェトプロテイン(AFP)高値

別 冊 No. 26

68 38歳の女性。腹痛のため来院した。1週間前から排便がなく、嘔吐や腹痛、腹部膨満感を自覚し徐々に増悪するため受診した。意識は清明。体温 37.2℃。脈拍 72/分、整。血圧 118/62 mmHg。呼吸数 18/分。SpO₂ 97% (room air)。腹部は膨隆し、腸雑音は亢進している。直腸指診で直腸子宮窩〈Douglas 窩〉に硬結を認めた。腹部エックス線単純写真の仰臥位像でハウストラを伴う拡張した腸管と、立位像で液面形成〈niveau〉を認めた。腹部 CT 検査で回腸から直腸までの腸管拡張と骨盤部に少量の腹水を認めた。上部消化管内視鏡検査で 4 型胃癌を認めた。嘔吐により食事がとれないため入院とし、末梢輸液を開始した。

今後行う対応として適切なのはどれか。2つ選べ。

- a 胃全摘術
- b 胃瘻造設
- c 嚥下訓練
- d 経鼻胃管留置
- e 中心静脈栄養

69 22歳の男性。頸髄損傷で入院中である。8週間前に高所から転落し受傷した。徒手筋力テストでは両側ともに上腕二頭筋 5、橈側手根伸筋 5、上腕三頭筋 4、深指屈筋 0、小指外転筋 0 である。体幹筋と下肢筋の筋収縮は認めない。両側上肢尺側、体幹、両下肢、肛門周囲の感覚の脱失を認める。

獲得が見込まれる活動はどれか。2つ選べ。

- a 自己導尿
- b 車いす移乗動作
- c 箸を使用しての食事動作
- d 両杖を使用しての平地歩行
- e 長下肢装具を使用しての階段昇降

70 68歳の男性。鼻出血と咳嗽を主訴に来院した。2か月前から鼻閉と難聴を自覚した。3週間前から鼻出血が間欠的に持続し、咳嗽も出現してきたため受診した。意識は清明。体温37.8℃。脈拍84/分、整。血圧142/78 mmHg。呼吸数22/分。SpO₂97%(room air)。両側の鼓膜に発赤と腫脹を認める。心音と呼吸音に異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。下肢に浮腫を認めない。表在リンパ節を触知しない。尿所見：蛋白2+、潜血2+、沈渣に赤血球20~29/HPF、顆粒円柱と赤血球円柱を認める。血液所見：赤血球322万、Hb9.9 g/dL、Ht28%、白血球12,300(好中球72%、好酸球3%、好塩基球1%、単球5%、リンパ球19%)、血小板38万。血液生化学所見：総蛋白6.8 g/dL、アルブミン3.3 g/dL、IgG1,200 mg/dL(基準960~1,960)、尿素窒素44 mg/dL、クレアチニン2.2 mg/dL。免疫血清学所見：CRP8.2 mg/dL、CH₅₀62 U/mL(基準30~40)。胸部エックス線写真で両肺野に多発結節影を認める。

この患者の寛解導入療法で副腎皮質ステロイドと併用する薬剤として適切なのはどれか。2つ選べ。

- a コルヒチン
- b リツキシマブ
- c シクロスポリン
- d メトトレキサート
- e シクロホスファミド

71 5歳の女児。3日前からの高熱を主訴に母親とともに来院した。咽頭痛と食欲低下を認めるが、咳嗽や鼻汁は認めない。体温 39.6℃。脈拍 120/分、整。呼吸数 28/分。SpO₂ 100% (room air)。活気良好。顔色良好。眼球結膜に軽度の発赤を認める。咽頭の発赤を認め、口蓋扁桃に白苔の付着を認める。両側の頸部に径 1.5 cm のリンパ節を 4 個ずつ触知する。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。

可能性が高い疾患はどれか。3つ選べ。

- a 川崎病
- b 溶連菌感染症
- c EBウイルス感染症
- d アデノウイルス感染症
- e パルボウイルス B19 感染症

72 40歳の男性。心窩部痛を主訴に来院した。昨日から心窩部痛を自覚していた。本日夕方、突然に激痛となり、動けなくなったため救急搬送された。身長172 cm、体重52 kg。体温37.0℃。心拍数116/分、整。血圧138/60 mmHg。呼吸数18/分。SpO₂ 97% (room air)。意識は清明。腹部は平坦で、全体に筋性防御を認め、上腹部に圧痛と反跳痛を認める。腸雑音は消失している。血液所見：赤血球488万、Hb 14.8 g/dL、Ht 44%、白血球12,200、血小板33万。血液生化学所見：総蛋白6.1 g/dL、アルブミン3.1 g/dL、総ビリルビン0.2 mg/dL、AST 18 U/L、ALT 19 U/L、LD 135 U/L (基準120~245)、尿素窒素10 mg/dL、クレアチニン0.7 mg/dL。CRP 1.7 mg/dL。腹部単純CTの軟部条件(別冊No. 27A)と肺野条件(別冊No. 27B)を別に示す。

まず行うのはどれか。3つ選べ。

- a 絶食
- b 輸液
- c 腹腔穿刺
- d 経鼻胃管挿入
- e 上部消化管内視鏡検査

別冊

No. 27 A、B

73 18歳の男性。寮生活をしている。発熱と意識障害を主訴に救急車で搬入された。前日から38.5℃の発熱と頭痛を認めた。本日にになり意味不明の言動がみられるようになったため友人が救急要請を行った。意識レベルはJCSⅡ-20。体温38.4℃。心拍数100/分、整。血圧102/70 mmHg。呼吸数24/分。SpO₂ 99% (マスク5 L/分酸素投与下)。項部硬直を認める。四肢に紫斑を認める。脳脊髄液検査：外観混濁、初圧220 mmH₂O (基準70~170)、細胞数861/mm³ (多核球790、単球71)、蛋白100 mg/dL、糖16 mg/dL (同時血糖128 mg/dL)。脳脊髄液のグラム染色ではグラム陰性双球菌と白血球による貪食像を認めた。

正しいのはどれか。3つ選べ。

- a 治療の第一選択薬はペニシリンである。
- b 脳脊髄液検体は培養開始まで冷蔵保存する。
- c この原因微生物に対する不活化ワクチンがある。
- d 診断後7日以内に保健所への届出が必要である。
- e 患者に接触した医療従事者には抗菌薬の予防投与を行う。

74 42歳の男性。腹痛を主訴に来院した。昨日昼から心窩部痛を自覚していた。今朝、起床時に嘔吐した。その後右下腹部痛を自覚し、徐々に増悪するため受診した。身長170 cm、体重78 kg。体温37.3℃。脈拍84/分、整。血圧126/78 mmHg。呼吸数16/分。SpO₂ 99% (room air)。腹部は平坦で、右下腹部に圧痛と反跳痛を認める。血液所見：赤血球486万、Hb 15.2 g/dL、Ht 43%、白血球16,200、血小板24万。血液生化学所見：総蛋白6.4 g/dL、アルブミン4.2 g/dL、総ビリルビン0.7 mg/dL、AST 23 U/L、ALT 18 U/L、LD 147 U/L (基準120~245)、尿素窒素20 mg/dL、クレアチニン0.9 mg/dL。CRP 0.9 mg/dL。腹部超音波検査では病変の描出が不明瞭であった。腹部造影CTの横断像(別冊No. 28 A)と斜冠状断像(別冊No. 28 B)を別に示す。

考慮すべき治療法はどれか。3つ選べ。

- a 手術
- b 輸液
- c 高圧浣腸
- d 抗菌薬投与
- e イレウス管挿入

別冊

No. 28 A、B

75 70歳の女性。脳梗塞後に右片麻痺が残存し、回復期リハビリテーション病院に入院中である。8週間前に右上下肢の脱力を自覚し、左内包梗塞の診断で急性期病院で保存的治療を受け、2週間前に回復期リハビリテーション病院に転院した。意識は清明。血圧116/70 mmHg。右利き。右上肢は痙縮のため肘関節屈曲90度、手指屈曲位であり、他動的に伸展は可能だが、全可動域で抵抗を感じる。手指の随意運動は認めない。徒手筋力テストでは、右腸腰筋4、右大腿四頭筋4、右前脛骨筋0、左上下肢筋力は5である。右半身の表在感覚と深部感覚に異常を認めない。端座位が可能、左手で手すりを使用して立ち上がり、立位保持は可能である。

リハビリテーションとして適切なのはどれか。3つ選べ。

- a 更衣動作訓練
- b 右手での書字訓練
- c 右上肢の他動可動域訓練
- d 短下肢装具と杖使用での歩行訓練
- e リクライニング車椅子使用での座位訓練

